

『重井筒』中之巻における助詞「が」と「の」

——「が」の用法の変化を中心に——

The particles “Ga” and “No” in *Kasane-wizutsu-2*
— Changes in the usages of the particle “Ga” —

新垣公弥子

1. はじめに

筆者はこれまでに『曾根崎心中』『堀川波鼓』『重井筒』（上之巻）における助詞「が」と「の」についてまとめた。本稿は『重井筒』（上之巻）においてまとめきれなかった中之巻についての用例をまとめた稿である。

助詞「が」と「の」については、多くの研究成果がある。しかし先行研究の成果だけで充分かといえば、必ずしもそうではない。筆者は、いくつかの課題を持ちながら、現代における助詞「が」の成立について明らかにしていきたいと考えている。その手始めとして、近松作品における助詞「が」の収集、分析を継続的に行っていく予定である。近松作品を取り上げる理由としては、本作品が助詞「が」の過渡期にある用法を含んでいると考えられること、そして大野（1987）のデータに欠ける1700年代から1800年代のデータを補う必要があるという2点があげられる。筆者は、このほど『曾根崎心中』『堀川波鼓』における助詞「が」と「の」をまとめた。本稿はそれに続く稿である。本稿では『重井筒』（1704-05）における助詞「が」と「の」の用例を収集し、そのデータを大野（1987）および『曾根崎心中』『堀川波鼓』のそれに加えて、助詞「が」の用法の変遷について観察した。その結果、『土佐日記』以来「が」の使用比率は「の」と比較すると若干の増減をみせながらも、全体として増加傾向にあるといえ『重井筒』も、その変化過程の中にあることを明らかにした（図3,図4）。また「が」のかかる形式比率（図5）においても助詞「が」は「体言が体言」から「体言が用言」へ移行する変化の中にあることを明らかにした。これまでは、大野（1987）の研究を基盤にデータを加えた結果であるが、本稿ではさらに以下のような点が明らかになった。

『重井筒』では助詞「が」の連体・主格・接続といった3つの用法が認められる。

その中でもまず、主格用法が「が」の全用例の58パーセントを占め、最も用例の多い用法であった。次に接続用法の「が」が23パーセントで、続いて連体用法が19パーセントであることがわかった。これまで筆者が調査してきた近松作品では、「が」の用法として主格用法、連体用法、接続用法の順に使用が多かったが、『重井筒』上之巻では、連体用法の使用例が接続用法よりも減り、助詞「が」における連体用法の衰退が見て取れる。

このようにひとつの作品において「が」の用法を数値化してみせたのは、管見による限りない。この数値化により、どのような割合で「が」の3つの用法が使用されているのかが明らかにされるばかりでなく、各作品を比較することで、その使用の変化、変遷を知ることができるものと推測される。以上のような見通しを持ちながら本稿では助詞「が」の用法について研究を進めていきたい。

1.1 研究の流れ

日本語において助詞が構文上、重要な働きをしていることは言うまでもない。その中でも比較的研究の進んでいるのが、助詞「が」であり「の」であろう。しかしながら、助詞「が」がどのように連体助詞としての職能を失っていくのか、またどのように主格助詞としての位置を確立していくのか、そして接続助詞としての位置をどのように確立していくのか、その詳細については、まだまだ明らかにしなければならない点が多く残されている。助詞「が」の用法の一つとして接続の働きが現れるのが鎌倉・室町期であるといわれる。その言語生活を反映していると考えられる作品の中から『重井筒』(1704-05)を本稿では取り上げ、現代語における「が」がどのような変化の過程を経て成立したのかについて考察したい。考察の手順としては、これまで助詞「が」との対で論じられてきた「の」の働きと比較しながら考察を進めていく。本論を進める前に「が」と「の」の研究史の概略をまとめて示すと以下ようになる。

助詞「が」と「の」についての研究は少なくない。青木(1952)では、万葉集、記紀歌謡、祝詞、宣命などにおいて、助詞「が」は親愛、親近感を表わし、さらにこれより転じて軽侮、嫌悪、憎悪等の感情を表わす場合に用いられ、一方「の」は敬意を表わす場合、またはある程度心理的距離を保つ場合に用いられるとされている。平安時代の「が」「の」にもほぼ同様の区別が認められ、話し手と心理的

距離の小さい語（親しい関係の語）には「が」、心理的距離の大きい語で（親しくない関係の語）には「の」がつくという、いわば親疎関係の差で「が」と「の」が用いられていたという指摘がなされている。この指摘を深化させ、大野(1978)は、その親疎の用法の基底には、ウチ・ソト意識があると述べている。

院政鎌倉時代あたりから「が」は軽卑、「の」は尊敬といった意味合いを持つ語との関係を密接にしていくようになる。山田(1954)では、これは「が」が、その承ける体言に意義上の主点を置くのに対し、「の」はそのかかる体言に主点を置くという旨を述べている。そして、此島(1973)では、その表現上の差異が、軽卑と尊敬の意となつてあらわれたのだとするが、やはり大野(1987)の指摘するように、基本的には、ウチ・ソト意識から軽卑「が」・尊敬「の」といった意味が派生し、そこからさらに非尊敬へとゆるやかな区別へ移行し、やがて室町時代を境にして、このような意味の区別も失われていったと考える方がより妥当であろう。

橋本(1969)を受け、大野(1987)は、構文上の働きでは、「が」も「の」ももとは体言（以下、A体言）と体言（以下、B体言）とを結ぶ連体助詞であったことを明らかにしている。すなわち、もとは「A体言+が+B体言」「A体言+の+B体言」という表現構造をつくっていた。「が」の承けるA体言は主体が「親・軽卑・ウチ」とみなすものであり、「の」の承けるA体言は主体が「疎・尊敬・ソト」とみなすものであった。この他にまた「A体言+が+活用語連体形+B体言」「A体言+の+活用語連体形+B体言」などの構造もあらわれ、時代が下るとともにこの構造も多くなっていく。そして中世になると、連体形が終止形を駆逐するという文法現象に加えて、「が」「の」の承けるA体言の意味上の差異も失われるという現象などを背景に、「A体言+が」は下の活用語との結びつきを強め、一方「A体言+の」は、下のB体言との結びつきをますます強めるようになる。このようにして現代語の主格助詞「が」、連体助詞「の」は成立したと考えられている。さらに「が」は、その用法を拡大させ、接続助詞としての機能も備えていく。

以上のように、助詞「が」「の」は、大きな変化を経て今日に至っている。この変化を概略的に踏まえながら、『重井筒』では助詞「が」と「の」がどのように用いられているのかについて観察しながら、連体助詞としての機能を失っていく「が」の有様、そして主格助詞成立の様子、加えて接続助詞成立の様子について

観察していく。

1.2 用例抽出の方法と示し方

まず、『近松浄瑠璃集上』日本古典文学大系に基づいて『重井筒』における「が」「の」の全用例を前後の文脈とともに抽出した。抽出した「が」「の」は、その用法に基づいて、大きく主格用法と連体修飾用法、接続用法に分類し研究ノート『『重井筒』中之巻における「が」と「の」』（2008）としてまとめた。

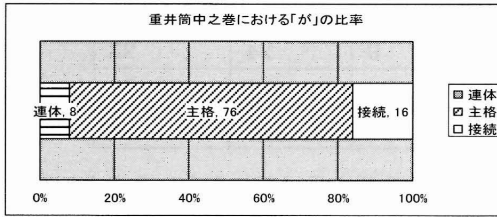
本稿を進めるにあたっては、「が」と「の」の用例数を示す必要があるが、その場合、全用例数を示すのか、あるいは異なり語数を示すのか、どちらの方法をとるのか、選択する必要がある。まず『重井筒』中之巻における「が」と「の」の全容を把握するためにも、できるだけ筆者がデータに手を加えることなく、すべての用例数を示すほうが『重井筒』中之巻の言語実態に即すものと考えられる。その後で、必要に応じて、異なり語数を示すことにするが、断りがない限りは、すべての用例数を示すこととする。次に大野（1987）のデータおよび新垣（2006）に本データを加え、データをグラフ化していく。『重井筒』中之巻のデータは全用例数をそのまま数値化した。

2. 『重井筒』中之巻における「が」の様相

『重井筒』中之巻において助詞「が」は、「我が身」のような連体助詞の用例がみられる他に、「目が見えず」のような主格助詞の用例もみられる。さらに「疵は付けまいがうぬが命に疵付ける。」のような接続用法の例も見られる。その内訳をみると、連体修飾の「が」は13例、主格助詞は38例、接続助詞が15例であった。これらの合計は66例である。これを100として『重井筒』中之巻における「が」の有様を示せば、(図1) のようになる。

「が」のもともとの職能であった連体用法を、主格用法さらには接続用法までもが、用例数として上回る結果となっている。しかしながら、「が」の連体用法も併用されており、まさに「が」の用法の移行・発展・残存といった様相を表わす結果となっているといえよう。

(図 1)



[表1]	%	実数
連体	8	4
主格	76	38
接続	16	8
計	100	50

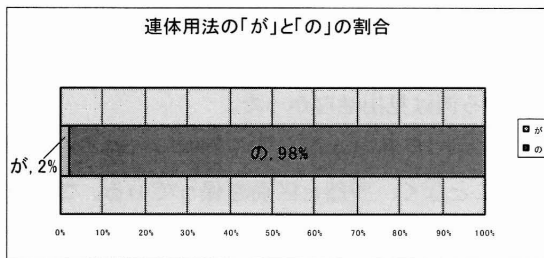
2.1 連体用法の「が」と「の」

助詞「が」と「の」は、その職能ゆえに両者を対照させながら、みていく必要があることは先行研究の示すところである。

まずここでは、連体用法の「が」について「の」と比較しながら論じていく。主格用法の「が」、接続用法の「が」については後述する。

『重井筒』中之巻における「が」「の」の承ける形式について、各々全用例数でみると「が」の承ける形式は66語、「の」の承ける形式は163語であった。この用例については新垣（2006手稿・研究ノート）に基づいている。全用例を100とした場合に、両者の承ける形式を比較してみると（図2）のようになる。「の」の承ける形式は92パーセントを占め、「の」は「が」よりも多くの形式を承けていることがわかる。

(図 2)



連体用法の「が」と「の」の割合		
[表2]	%	実数
が	2	4
の	98	166
合計	100	170

さらに連体用法の「が」と「の」の承ける形式を異なり語数でみると、「が」の承ける形式は8語であった。また「の」の承ける形式は106語であった。これを「が」「の」各々について、[表3]のように「(1) 人を表わす語」と「(2) 人以外の語」とに分け、その比率をみると次のようになる。

[表3]	が		の	
	実数	異なり語数	実数	異なり語数
(1)人を表す語	13	9	24	23
(2)人以外の語	37	34	142	71
	50	43	166	94

[表3]から、「が」と「の」は概して異なる語を承けているといえよう。すなわち、「が」は主に「(1) 人を表す語」を承け、「の」は「(2) 人以外の語」を承けているといえる。このことは大きく先行研究の示す他の作品における「が」と「の」の使用比率の結果に合致するといえる。

『重井筒』における「の」の承ける形式に着目すると、「私」「女夫」において「が」「の」の両助詞で承ける例が見出せた。「私が顔」「私が受合い」「私がほれたのはいろはの中に有るといふ」「私が智恵ではあるまい。」「私が御無心御恩に受けうと有りければ。」「私のもの」「女夫が何に借錢しませうぞ」「女夫がいひ合せ」「女夫の中」「女ども女房の印判までを引捜し。」

『曾根崎心中』では「二人の心ぞ」「二人が中に降る涙」といった各1例の例を見出すことができた。また『堀川波鼓』でも「二人の袖下」「二人の袂」「二人の女」のように「二人」という語は「の」で承けられていた。新垣(2006a)で指摘したように、本来、数詞である「二人」は「の」で承けるべきところであるが、『曾根崎心中』『堀川波鼓』では「の」「が」の両方で承けており、承ける体言のウチ・ソト意識に混乱が生じていることがわかる。では『重井筒』中之巻・下之巻においてはどのような状況にあるかといえ、二人の親」1例を確認することはできたが、「が」で「二人」を承ける例は見出せなかった。

上記の例のように「が」と「の」の承ける体言が混乱する例がみられるものの、基本的には、承ける体言は重複することなく、整然と区別を保っている。つまり、『曾根崎心中』『堀川波鼓』『重井筒』上之巻において助詞「が」と「の」は、その承ける形式を異にすることで、基本的にはその機能を区別している状況にあるといえる。

2.1.1 「が」の用法

[表3]では、助詞「が」と「の」が承ける体言を「(1) 人を表す語」と「(2)

人以外の語」に分けて示した。「が」の連体用法において、承ける体言の「(1)人を表わす語」は、さらに[代名詞・親族語彙][人名]のように下位分類できる。これらに分類される語彙は次の通りである。例えば、[代名詞・親族語彙]には「うぬ」「おれ」「君」「我」「私」「私」といった語例がみられた。[人名]には「小市郎」「竹」というものがみられた。これを以下[表4]に示す。

平安時代になると、「が」の用法として、ウチ扱いする相手の範囲がやや広くなり、夫や妻・親子だけという限られたウチの人から、次第に「召使」などまでも承けるようになってくるのが、大野(1987)で述べられている。『重井筒』では「丁稚め」を「が」で承けている。しかしながら「丁稚めが咄にちがひなしと。」という例であり、「が」の主格用法となっている。

また『曽根崎心中』では「奴」を「が」で承けていた。『堀川波鼓』でも「が」は、ごく身近な人を承けているといえるが、「下女」「下人」も「が」で承けている。「召使」と「下女」「下人」「奴」を同列に扱うことができるのかということ、前代において、これらが「が」で承けられていたかどうかについても調べてみる必要がある。大野(1987)によれば、「が」は年月とともにその使われ方が拡大し、承ける形式についていえば、呼び捨てにする人間の名前を承けたとの報告がある。例えば、「漢文訓読などで、官職の名もない人名だけの名前が出てくるが、その大部分を「が」で承けている。人の名前を呼び捨てにするのは、相手をウチ扱いするものだという古い習慣により、人名を扱う場合には「が」を用いた」と解釈している。このような用法は『重井筒』上之巻にも見られ、既述のとおり「が」は「小市郎」「竹」といった人名を承けている。

次に時間を表わす「今日」「明日」といった体言についてであるが、これについても新垣(2006a)で指摘したとおりである。『曽根崎心中』では「今日が日まで」「明日のこと」という用例が現れていたが、「が」の働きを考えれば、「人以外の語」である「今日」は、本来のウチ・ソトの関係でいえば「の」で承けられるべきところである。『堀川波鼓』では「今日の祭客」「今日のはれ」のように「今日」が「の」で承けられている例が2例認められた。また『重井筒』では「が」で承ける例が見出せなかった。今後より多くのデータを収集する必要があるが、近松作品において「今日」という体言は次第にウチ・ソト意識崩壊の渦中にあるといえよう。

[表4] 連体助詞「が」の承ける語

「(1) 人を表わす語」

代名詞・親族語彙・・兄貴までが、お前が、女どもが、誰が、飛脚屋が、我が、私が、丁稚が

人名・・・・・房が

[表5] 連体助詞「が」の承ける語

「(2) 人以外の語」

なし

次に「が」の用例は比較的少ないとはいえ、[表5]のように「(2) 人以外の語」も承ける。上記の具体的な用例は「外が内。」というものである。客観事物を表わす「外」を「が」で承けているということは、「外」を話し手である「我」が身近であると捉えていることになる、その点で「が」の承ける体言が前代よりも拡大したといえる。

2.1.2 「の」の用法

ここでは、上述の「が」との対比として「の」の用法についてみていく。「の」は圧倒的に客観事物を承けるが、比較的少ないとはいえ、[表6]のように「(1) 人を表わす語」も承ける。

[表6] 「の」の承ける「(1) 人を表わす語」

代名詞・親族語彙・・こなたの、そなたの、兄貴の、男男の、男の、女どもの、主の、人の、私の、兄御の、兄嫁御の、入婿の、舅の、旦那の、女房の、夫婦の、孫の、女夫の、隠居様の、隠居の、夫の、親仁の

人名・人を表す語・・喜兵衛の、内外の者の

次に「の」の多くは「(2) 人以外の語」を承ける。これを示せば、[表6]のようになる。所属語彙が多いが、紙面の許す限り語例を示していく。

[表6] 「の」の承ける「(2) 人以外の語」

数詞・・三世の、二人の、二人目の、三十ばかりの、丁銀四百目包の、三十日の、千々の

地名・場所・・堀江の、伊勢の、内の、内外の、奥の、門の、京の、紺屋の、

下の、谷町の、茶屋の、内々の、中の、中の島の、人置の、鎗屋町の、吉
文字屋の、六軒町の、方々の、客衆とやらの、南の、最前の
時間・昨夜限の、明日の、いつもの、今の、重井筒の、今日の、後日の、今
宵の、師走の、正月前の、年季の、後の
自然・植物・天候・月の、霜の
身体に関する語・我が身の、身代の、阿保の、坊主天窓の、頭痛の、いふ顔
の、老眼の
人の感情・身につけるもの・下心の、心の、気の、宵寝まどひの、誂の
食物・酒の、塩の
神・諸佛の、法界の、氏神様の
その他・暖簾、何の、跡の、家の、生死の、一夜の、一服の、踊の、銀の、
釜の、大事の、薪の、涙の、鋸屑の、虎落の、いろはの、實事の、餘の、
よそよその、留守の、持って行けとの、あの、彼の、此の、その、其の、
是程の、とても、捨てたの、退いての、銀まで見せての

3. 「が」の「承ける形式」と「かかる形式」の変化

3.1 「が」の用法の変遷

これまででは、「A体言+が+B体言」の用法について「A体言+の+B体言」と比較しながら、「が」の用法についてみてきた。ここでは、助詞「が」の「承ける形式」と「かかる形式」の変化について観察し、主格助詞「が」の成立にはどのような構文上の要因があるのかについて考察する手がかりとしたい。大野（1987）では、すでに奈良時代に、B体言の部分に用言がくる例がみられることが指摘されているが、「が」の下に用言の終止形がきて、文を終止する例はまだ発見できない旨が述べられている。「が」の変遷にはいくつかのバリエーションが存在することは推測するに難しくなく、大野（1987）では、おおよそ5つのパターンで「が」の承ける形式、かかる形式の変化の様子を示している。しかしながら十分に整理しつくされているかといえば、必ずしもそうではなく、この項については今後、資料の整理を通して考察を深める必要がある。今回は大野（1987）の分類をできるだけ忠実に概略しながら『重井筒』の用例を示すにとどめる。

3.2 「ウチなる体言+が+用言の連体形」

「が」の下の用言の下には、

- 1) 君 が 行く道 (万葉集3724・連体)
- 2) 我 が 待ち問ふに (万葉集3957・連体)

上記のように、体言または体言を承けるはずの助詞などがくる。1)の「行く」は連体形で、「道」にかかり収まっていく。また2)の「に」という助詞は、名詞を承けるのが一般的であるので、動詞を承ける際には連体形を承ける。「問ふ」も連体形であり、結局のところ、1)も2)も「体言が体言」という形に集約される。そして「が」の下には決して形容詞がこないことが特徴であり、なぜ「が」の下には形容詞がこないのか、ということが問題なのである。

3.3 「ウチなる用言+が+シク活用+さ」

「が」の下には決して形容詞がこないことが大野（1987）により指摘され、なぜ「が」の下には形容詞がこないのか、ということについて、形容詞をク活用、シク活用に分け、その職能と合わせて興味深い指摘がなされている。(p.133)

なぜ、「が」の下に形容詞がこないのかということについて次のように述べている。

- 1)吾を待たすらむ 母 が かなしさ (万葉集890・連体)
- 2)春菜摘む子を 見る が かなしさ (万葉集1442・連体)

上記のような例である。助詞「が」はウチの人間を承ける助詞であったが、特に「吾・我」などを承けることが圧倒的に多かった。つまり、上記の2)「が」の承けている「見る」という連体形は、ウチの人間の、特に「我」の行為そのものとして扱われたものと考えられる。そして「が」の下には「かなしさ」のような情緒を表わす名詞を置き、これにより「見るがかなしさ」（自分が見るのはかなしい）ということを表現している。ここで重要なことは、用言を承けるという用法が誕生したということである。

時代の下る『堀川波鼓』では、このような用法がすでに確立されていると考えられるが、その用例は見出せなかった。

3.4 「用言の連体形+が」の用法

ウチ扱いの体言を承ける「が」が、すでに『万葉集』にも、わずかではあるがみられる。大野(1987)は次のような例を示している。

寄るべき磯の無き が 淋しさ (万葉集3226・連体)

「が」はもともと人間しか承けなかったのだが、上記の例は形容詞の連体形を承けている。そして、その下にはシク活用の形容詞「さぶし」を連体形にした「さぶしさ」がきている。さらに、平安時代になると、このような用法が拡大されて、事柄全体を「が」で承けるようになっていく。

みづから聞こえぬ が わりなきこと (蜻蛉日記上巻・連体)

酒なれば飲んであげる が ご馳走と。(堀川波鼓・連体)

このように用言の連体形の下に「が」がきて、それが下の「淋しい」や「わりない」といった情意表現につづいていくという形は、「が」の用法の発展として注目されると大野(1987)は述べている。

以上は助詞「が」の連体用法である。次に「が」の主格用法について観察していく。

『曾根崎心中』『堀川波鼓』では「用言の連体形+が+形式」の形が表われているが、必ずしも「が」の下には情意表現の語彙がきているわけではない。これは大野(1987)が例示している『蜻蛉日記』の用法よりも、より発展した「が」の用法であると考えられる。

さて話すこと が 有る (曾根崎心中・主格)

此の母といふ人 が 此の世があつた世へかへつても。にぎつた銀をはなさばこそ。京の五條の醤油問屋常々銀の取りやりすれば。是を頼に上つて見ても折しも悪う銀もなし。(曾根崎心中・主格)

次に接続用法について観察していく。

門に立ちける が 内には舅の喚声。(重井筒・接続)

3.5 「ソト扱いの形式+が+シク活用」

3.2で見てきたように、助詞「が」が動詞の連体形を承ける場合、その動作主体は、当初自分自身であったことは、想像に難くない。『万葉集』以来「が」の承ける体言の多くが「我」「吾」であったことを見てもこのことは理解できる。しかし、

「が」は徐々に、自分の動作に限らず相手の動作、第三者的な状態、あるいは形容詞の連体形までも承けるように、用法を拡大していった。『万葉集』にはわずかながら、次のような例があることを大野（1987）では指摘している。

初瀬川寄るべき磯の無き が さぶしさ（万葉集3226・連体）

これは「寄るべきよい磯の無いことの淋しさよ」という意味である。ここでは「が」は、「無し」という語を承けている。これは「が」の承ける形式が3.2で見たような「我」の行為そのものとして扱われた形式ではないにも関わらず、「が」で承けたという意味で、「が」の用法が拡大した例といえる。

3.6 「ウチなる用言+が+ク活用（さ）」

助詞「が」は、その下にク活用の形容詞を基幹とする名詞相当の形式をBとして持つに至る。このような用例もわずかに見出せる。

清き川瀬を 見る が さやけさ（万葉集1737・連体）

『重井筒』では、「ウチなる用言+が+ク活用（さ）」の形は見出せなかったが、次に示すような「体言+が+ク活用」の形が1例、見出せた。

懐 が 重うて（曾根崎心中・主格）

この例は「が」のかかる形式が、形容詞であること、さらには連用形になっている点で、「が」のかかる形式としては、ひとつその用法を拡大させたといえよう。しかしながら、「が」の承ける形式としてはウチなる体言の範囲内であるといえる。

3.7 「体言+が+形容詞」

3.2では、『万葉集』では「が」の下に形容詞がこない、ということについてその概略を述べた。時代の下った『重井筒』『堀川波鼓』では次のような例が見られる。

瀬戸 が なうてなうてうかうかと尽した。（重井筒・主格）

是 が 嬉しかりうか。（重井筒・主格）

房め が 後の為もよい。（重井筒・主格）

手鼓なりとも打った が よい（堀川波鼓・主格）

曲 が ない（堀川波鼓・主格）

以上、3. 「が」の「承ける形式」と「かかる形式」の変化について述べたが、

これは、主格助詞「が」の成立を考える上で、もっとも核心となる点であると考えられるので資料の整備がいそがれる。

4. 接続助詞「が」の成立

4.1 「が」の用法の拡大

次世代を担うべく「が」の用法は拡大されていく。そのことについては大野(1987)に詳しいので概略みていく。

古典語といわれる鎌倉時代までの作品では、「の」は「が」の20倍から8倍くらいの使用頻度であった。ところが、室町時代以降になると、「の」の「が」に対する倍率は3.9から1.4倍くらいに激減する。この激減の理由は、「が」の用法の拡大にある。つまり「が」の用法が次第に拡大され、多用されるに至ったからである。まず、「が」の用法が拡大するさきがけとして、次のような例がある。

世もめでたく治まって、民のわづらひもなかりしが、高倉宮の御謀反によつて又天下乱れて(『平家物語』巻五富士川)

今日みられる「見たが分からなかった」のような、いわゆる接続助詞「が」の用法がこの鎌倉時代から顕著になってきた。

以上のような接続助詞の用法が『天草本平家物語』では「が」の全例のおよそ20パーセントを占めているとのことである。ちなみに、『重井筒』では「が」の接続用法の例は、図1で示したように23パーセントとなっている。

表8,表9は各作品における「が」「の」の全用例数を示したものである。これをグラフ化したのが図3,図4である。図3,図4を比較すると、「が」の用例数は概して増加傾向にあることがわかる。これは既述のような接続助詞「が」の用法が確立されたことに起因するものと考えられる。

しかしながら、「が」の用例の増加の要因は、これだけではなく、その他にも次のようなことが考えられる。これまで連体用法が主であった「が」は、ウチの人間だけを承げ、また「我が国」のように、体言と体言を結ぶ働きをしていた「が」が『平家物語』では「我が行く道」「君がとるもの」といったように、下に用言のくる例が非常に増えてくる。そして「が」の下に直接体言がくるような「梅が香」のような「体言+が+体言」といった用法が減少していく。この「君が為」「荻が

(図3)

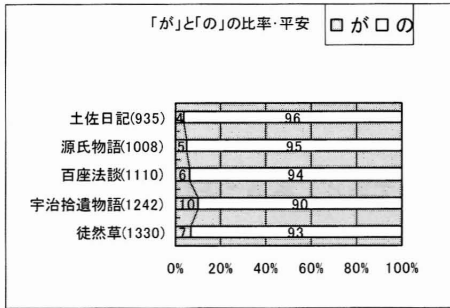


表8	作品名	が	の	のの倍率
平安鎌倉	土佐日記	21	451	21.5
	源氏物語	961	19,539	20.3
	百座法談	55	896	16.3
	宇治拾遺物語	617	5,650	9.1
	徒然草	106	1,491	14.1
	覚一本平家物語	1,521	12,047	7.9

(図4)

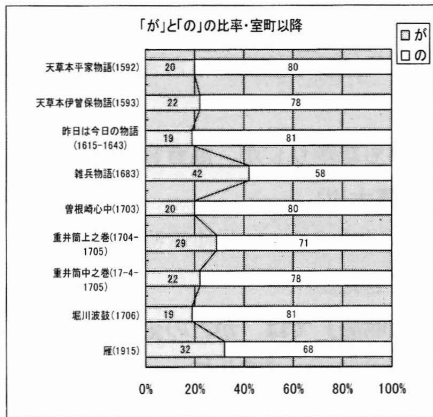


表9	作品名	が	の	のの倍率
室町以降	天草本平家物語	1,514	5,904	3.9
	天草本伊曾保物語	425	1,547	3.6
	昨日は今日の物語	125	519	4.2
	雑兵物語	481	653	1.4
	曾根崎心中	95	371	3.9
	重井筒上之巻	66	163	2.5
	重井筒中之巻	50	181	3.6
	堀川波鼓	102	484	4.7
	雁	1,356	2,934	2.2

枝」(「体言+が+体言」)のような本来からの用法は、鎌倉時代の作品では、「体言+が+形式」の形のおよそ70パーセントを占めていたことが大野(1987)により指摘されている。しかし図5に示す通り『天草本平家物語』では、それが30パーセントに減っている。そして現代語ではさらに減少し、数えるほどしかない状況である。その代わりに「体言+が+用言」といった形が非常に増えてきた。

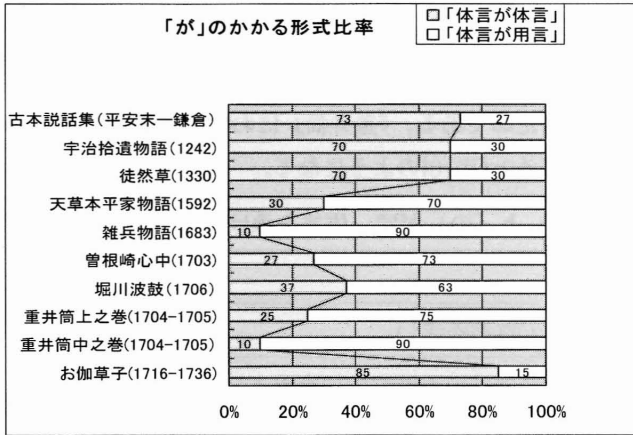
図5に示した「「が」のかかる形式比率」のグラフは、大野(1987 p.153)のデータに『曾根崎心中』『堀川波鼓』そして『重井筒』のデータを加え、筆者が作成したものである。大野(1987)ではパーセントの値が示されているに留まっているが、どのような数をどのように算出したのかが非常に重要であると思われるので、参考資料として以下に具体的な用例数を示しておく。『重井筒』では助詞

「が」が体言にかかる例（連体用法）が13例認められた。また、用言にかかる例（主格用法）は38例であった。表1をあわせて参照されたい。これを100としてパーセントの値を出したものが図5である。

図5「「が」のかかる形式比率」をみると、『古本説話集』にはじまり、『宇治拾遺物語』『徒然草』『天草本平家物語』『雑兵物語』と「が」のかかる形式に「用言」がくる用例が増えていることがわかる。『雑兵物語』よりも時代の下る『曾根崎心中』『堀川波鼓』『重井筒』の「が」のかかる形式としては、「用言」の形が増加するものと予測していたが、結果としては用言にかかる用例は『雑兵物語』よりも少なくなっている。

また、大野（1987）も指摘するように『お伽草子』の値については今後考察を深める必要がある。

(図5)



以上、図5に示すように「が」は、そのかかる形式を変化させる。これと平行して承ける形式も変化、拡大させていったことは、「3. 「が」の「承ける形式」と「かかる形式」の変化」で述べたとおりである。

古くはウチの人間が大部分を占めていたのに、『天草本平家物語』では、「人目がしげうござるによつて」「足音が高う聞こえれば」「夜が更けまらせうずれども」のように「人目」「足音」「夜」など、古くはソト扱いしたものも「が」で承ける例が増えているとの結果が大野（1987）でなされている。これは「が」で承ける体言と「の」で承ける体言とが、ほとんど同じものになってしまった、ある

いは、まったく同じような働きをするようになったという現象のあらわれで、結局のところ、話し手である我が、何をウチとし何をソトと捉えるかという観念が混乱し、従来のような固定的なウチ・ソト意識が崩壊したことを意味する。また大野（1987）は、社会生活における階層の別の混乱が、ウチとソト、軽蔑と尊敬を区別するのに用いられた「が」と「の」の用法の混乱という形で、言語に反映された旨を述べている。

しかも、ウチ・ソトの混乱により「が」と「の」の区別が変化するにあたり、かつては「が」に比較して、「の」の使用頻度が高いのに対し、「が」が「の」の役割を奪うことにより勢力を増していく傾向が顕著である。例えば古い写本では、

其の人の亡びたらば (平家物語・卷一殿下乗合)

其の人が亡びたらば (天草本平家物語)

とあることは大野（1987p.155）の指摘するところである。このように、「が」が「の」にとって変わっているのである。

つまり、先にも述べたが、「が」の接続用法の確立、発展が助詞「が」の使用頻度を高める要因となったのである。『重井筒』における「が」と「の」が同一体言を承ける用例をまとめると[表10]のようになる。

わし 私	わし 私が顔	私の物
	わし 私が智恵ではあるまい。	
私	私がほれたのはいろはの中に有るといふ。	私の中
	私が受合ひ	
女夫	女夫が何に借錢ませうぞ	女夫の中
	女夫がいひ合わせ	

6. まとめ

助詞「が」のもともとの働きは「体言」と「体言」とを結ぶ働きであったことは先に述べた通りである。「が」の承ける体言を「A体言」、「が」のかかる体言を「B体言」とすると、助詞「が」はその双方の形を少しずつ変化させることで、

その職能を広げるとともに、その使用頻度を増しながら、現代日本語における主格助詞という位置を獲得し、さらには接続助詞という機能をも持つようになった。

大野（1987）は、助詞「が」の承ける「A体言」と、「が」のかかる「B体言」のそれぞれについて、それぞれがどのような段階を経て変化してきたのかについて研究している。大野（1987）のデータは助詞「が」と「の」の関係の変遷を見ていく上で重要なデータであることは周知の通りである。しかしながら、それで充分であるかといえば必ずしもそうではない。図3、図4からもわかるように、大野（1987）のデータには1700年代～1800年代の資料が不足している。本稿では1704から1705年にかけて成立したといわれる『重井筒』を取り上げ、大野のデータを補った。『重井筒』では、「が」がどのような状況にあるのか観察するとともに、それが、助詞「が」全体の変化の過程においてどのような位置を占めるのか、大野のデータも含めてグラフ化した。

その結果は、図3、図4に示した通りである。平安時代から明治時代にかけての各作品の中に『重井筒』の「が」と「の」の比率を当てはめてみると、『土佐日記』以来「が」の使用比率は若干の増減をみせながらも、全体として増加傾向にあるといえる。『重井筒』の場合もその変化に合致するといえよう。

次に図5は、各作品における「が」のかかる形式の比率についてグラフ化したものである。これも増減はみられるものの全体としては「体言が体言」の形から「体言が用言」の形へと移行しているとみられる。『重井筒』の場合もこの変化の中にあるものと解されるが、大野（1987）でも指摘されているように『お伽草子』の数値が突出して「体言が体言」の形になっているので、その要因解明については今後の課題である。

以上が各作品の中における『重井筒』の「が」の有様である。以下『重井筒』に着目し、その「が」の有様についてみていく。

まず、本来、連体助詞としての働きをする助詞「が」であるが、『重井筒』では「うぬ」「おれ」「君」「我」「私わたし」「私わし」といった体言を承けている。そして「小市郎」「竹」「房」といった人名も承けている。さらに、「外」といった「人以外の語」をも承けてる。しかしながら、基本的にはウチなる体言は「が」で受けられているといえよう。

次に、主格用法の「が」についてまとめる。『重井筒』における「が」の割合を

見てみると、66例中、主格助詞は38例（連体助詞は13例、接続助詞は15例）となっている（図1,表1参照）。具体例をあげれば次のようになる。「目が見えず」「埒があかぬのあかぬの」などである。

『重井筒』における「が」の有様は、連体助詞としては承ける体言（A体言）をウチ・ソトで区別しながらも、前代よりもウチ扱いの体言を拡大させている。さらに、主格用法が発達し、「是が嬉しかろうか。」「瀬戸がなうて」のように、かかる体言（B体言）に形容詞がかかる例もみられる。

以上のように、『重井筒』における「が」と「の」の承ける形式、かかる形式についてデータをまとめ、助詞「が」の3つの（連体・主格・接続）用法の有様について観察した。今一度、本研究の概要をまとめると次のようになる。

I. 大野（1987）のデータに『重井筒』のデータを加え、グラフ化し「が」の用法の変遷について観察した。

II. 『重井筒』にみられる「が」の用法の整理をした。

前代までの用例の基準から逸脱すると考えられる「が」用法

1. 連体用法（「が」の承ける語）

①「丁稚め」（侮蔑語）、②「外」（客観事物）

2. 主格用法

①「是が嬉しかろうか。」「瀬戸がなうて」（形容詞にかかる）

3. 接続用法

①「亭主も辻まで行くか見えしが三十ばかりの女房と。」、②「萬年町に
帰りしが。」

以上が本研究の概要である。今後の課題としては、近松の他の作品における「が」についても調査を進め、①連体助詞としての「が」の衰退の有様、②主格助詞「が」の成立（承ける形式・かかる形式の変化を中心にみていく）、③接続助詞「が」の成立について、その詳細を明らかにしていく。特に、「が」の承ける形式、かかる形式の変化の詳細をみることで、主格助詞「が」の成立の要因が明らかにされるものと考えられる。

参考文献

- 青木伶子 (1952) 「奈良時代における連体詞「ガ」「ノ」の差異について」『国語と国文学』第29巻7号
- 浅見 徹 (1956) 「「広さ」と「狭さ」」『万葉』20号
- 池上禎造 (1943) 「「梅が花」と「梅の花」」澤瀉久田孝編『万葉雑記』晃文社
- 石垣謙二 (1955) 「主格「ガ」助詞より接続「ガ」助詞へ」『助詞の歴史的研究』岩波書店
- 上田萬年・樋口慶千代 共選 (1930) 『近松語集』富山房
- 内間直仁 (1990) 『沖縄言語と共同体』社会評論社
- 内間直仁 (1994) 『琉球方言助詞と表現の研究』武蔵野書院
- 内間直仁・新垣公弥子 (2000) 『沖縄北部・南部方言の記述的研究』風間書房
- 梅林博人 (1987) 「奈良時代における主格助詞「が」の萌芽」『語文論叢』千葉大学人文学部国語国文学会編
- 大野 晋 (1978) 『日本語の文法を考える』岩波書店
- 大野 晋 (1987) 『文法と語彙』岩波書店
- 近世文学総索引編纂委員会編 (1986) 『近世文学総索引近松門左衛門』第一巻～第六巻・別巻 教育社
- 小林芳規 (1976) 「中山法華経寺本三教指帰注の文章と用語」『国文学攷』72・73 合併号 広島大学国語国文学会
- 此島正年 (1973) 『国語助詞の研究』桜楓社
- 北原保雄 (1993) 『日本語助動詞の研究』大修館書店
- 重友毅校注 (1961) 『近松浄瑠璃集上』(日本古典文学大系) 岩波書店
- 寿岳章子 (1963) 「室町時代の「の・が」」『国語国文』7月号 東京大学
- 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』岩波書店
- 山田孝雄 (1954) 『奈良朝文法史』宝文館
- 山根為雄編 (1995) 『『近松全集』文字諸系譜索引』和泉書院
- 新垣公弥子 (2001) 「『おもろさうし』におけるウチとソト」『日本文学』7号 日本文学協会
- 新垣公弥子 (2005) 「『曾根崎心中』における「が」と「の」(手稿・研究ノート)
- 新垣公弥子 (2006a) 「『曾根崎心中』における「が」と「の」」『社会文化科学研

究科』12号 千葉大学社会文化科学研究科

新垣公弥子 (2006) 『堀川波鼓』における「が」と「の」(手稿・研究ノート)

新垣公弥子 (2006b) 『堀川波鼓』における「が」と「の」『麒麟』第15号 神
奈川大学17世紀文学研究会

新垣公弥子 (2006) 『重井筒』における「が」と「の」(手稿・研究ノート)

新垣公弥子 (2007) 『重井筒』上之巻における「が」と「の」『麒麟』第16号
神奈川大学17世紀文学研究会